

対談

アフリカ体験は若者の視野を広げる

国連ミレニアム開発目標の達成を目指してサハラ砂漠以南の僻地の人々の自立支援などを行なう「ミレニアム・プロミス・ジャパン」に参加する若者はアフリカ体験を通じて視野を広げ、大きく成長する

ミレニアム・プロミス・ジャパン理事長 鈴木りえこ

ジャーナリスト 細川珠生

女の子は赤ちゃんを背負って学校に来る

——今年、ミレニアム開発目標の達成の期限です。部分的には達成できるものもあると聞いていますが、目標達成は簡単ではないようですね。

鈴木 目標は八つあり、そのうち一番弱いのは、乳幼児の死亡率の低減と妊産婦の健康の改善です。ミレニアム・ビレッジも同様です。子供たちを小学校に入れることは比較的簡単に見えますが、無理に学校へ送ると家で赤ちゃんの面倒を見る人がい

なくなるので、私たちが支援しているウガンダでは保育園、幼稚園をつくってほしいと言われました。

小学校を建設したら今度は保育園までと、どんどん要求が高まるのではないかと不安に思ったのですが、現地に行ってみると、女の子が赤ちゃんを背負って学校に来ているので、小さい子の面倒を見る場所がないと、女の子は学校に通えない。そういう事情は現地に行ってみないと分かりません。

細川 どれくらいの頻度でアフリカに行かれますか。体調を崩



すこともおありでしょうに、あの意味命がけの活動ですね。

鈴木 昨年は3回行き、今春はウガンダ、ケニア、マラウイに行く予定です。ミレニアム・プ

ほそかわ・たまお 聖心女子大学英文科卒業。米ペーパーダイナ大学政治学部留学。95年『娘のいいぶん〜ガンコ親父にうまく育てられる法』(情報センター出版局)で第15回日本文芸大賞女流文学新人賞受賞。パーソナリティを務めるラジオ日本「細川珠生のモーニングトーク」(2009年迄は「珠生・隆一郎のモーニングトーク」)は放送千回を超える。『未来を託す男たち〜次世代リーダー10人の主張』(ぶんか社)で2000年、第9回JNLAブロンズ賞を受賞。故細川隆一郎は父、故細川隆元は大叔父。ラジオ出演や執筆の他、政府の審議会等で委員を務める。熊本藩主・細川忠興の末裔。日本舞踊師範の資格を持つ(岩井流)。

ロミス・ジャパン(MPJ)傘下の「MPJユース」には東大はじめ約60人の学生がいますが、昨春、そのなかの12人とウガンダに行き、私たちが支援している

女兒の家に泊めてもらいました。

彼女の両親はタンザニアからの難民で、崖の上に建っていた家にはトイレもないし、電気もありません。年収が300ドルなのです。寝袋を持参したのですが、用意してくれたベッドで寝たら20力所くらいダニに噛まられてしまいました。現地に行くと、たいていお腹をこわしてしまいます。タンザニアでは肺炎になりました。

日本ではできない経験で若い人を育てる

細川 健康だけでなく、治安も



すずき・りえこ 日本女子大学英米文学科卒業、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカルサイエンス大学院国際関係学部修士課程修了。(株)電通総研(現電通)に就職。研究部チーフプロデューサーや主任研究員を歴任。政府の審議会委員、諮問委員会委員ほか、内閣府の広報テレビ番組等で活躍。1997年電通総研社長賞受賞。2004年夫妻で渡米し、ニューヨーク滞在中にNPO法人ミレニアム・プロミス(MP)創立者ジェフリー・サックス教授(国連事務総長特別顧問)夫妻らと共にアフリカを訪問。帰国後、2008年にNPO法人MP・ジャパンを設立。毎年アフリカ諸国を訪問し、女兒教育支援などに力を入れている。

良くない。そんな危険な状況で活動を続けていくには、強い使命感とタフな精神力を持つていないとできないですね。どのようにしてモチベーションを高めていらっしゃるのですか。

鈴木 たまたま関わったので続けていますが、日本に生まれた以上は、日本のためにもなりたいたいと思います。海外に行くくと、日本に対する期待の高さを感じます。ヨーロッパの国々はアフリカを搾取したという歴史がありますが、幸い日本にはそれがありません。アフリカの人々はすごく親近感を持ってく

れているのです。戦後、努力して短期間に復興したというプラスのイメージと、「日本のようになりたい」という憧れでしょうか。

——「MPJユース」の設立の目的はどこにあるのですか。

鈴木 日本の若者には希望がない、幸福感が少なくとみなさんおっしゃる。けれども、アフリカに行ったら不幸や貧しさはこんなものではない、ということを若い人に知ってもらいたいのです。極度の貧困の状況を知れば、視野が広がり、自己価値が高まるはず。そうすれば日本やアフリカ、世界のためになることをやりたいと思う若者も増えるでしょう。

細川 日本ではできない経験を生かして若い人を育てるといふ意義は大きいですね。

鈴木 アフリカでは、法律で結婚最低年齢が決められていても、女の子は13、14歳でお嫁に行かされてしまう場合が少なくないのです。中学校へ進学できないから、家の周りでブラブラして



中等教育女子支援をしている女兒の自宅に宿泊(ウガンダ)

いと妊娠してしまう、と聞ききました。イスラム教徒ですとその後結婚が難しく、生まれてくる子供は親が面倒みなければならぬ。それで、親は早く結婚させたいという面があるようです。とはいえ、女の子たちも高等教育へ進めるようになって変化が生まれています。かつては父親が「お嫁に行きなさい」と言えばそれに従うしかなかったけれど、いまは本人の意志を尊重

都内に



してもらい学校へ行き、看護師になって家族を養うことができず。アフリカも少しずつ変わってきているのです。

女性が教育を受けることが世界を変える

細川 やつぱり、女の子が学べる場があることは一番大事ですね。そこで、男性や周囲の価値観が変わってくる。

鈴木 私は2000年に「超少子化」という本を出して、そこにも書きましたが、人口抑制には女性に教育を与えるのが一番と言われています。女性が教育を受けることが、世界を変えるのに一番必要だと思っております。

細川 日本では、女性の高学歴化で晩婚化し、高齢出産化につながって少子化という結果を招いています。働きながら子供を育てるのはとても大変です。

女の人は社会に出ると弱者です、色々な意味で。改善されたとはいえ、子育てしながら仕事を続けるのは大変で、子供を連

れて街に出るとお母さんはとても肩身が狭い。危険もいっぱいだから、そういう人たちが住み良い環境は、お年寄りをはじめ誰にとっても住みやすいと思いますが、政策を決めているのは男性たち。そこを変えないと。

鈴木 ワーク・ライフ・バランスで男の人が生き方と働き方を変えるしかないと思いますね。それから、女性の国会議員の数が少ない。実は、アフリカの国では女性の国会議員の数が多く、ルワンダは世界一です。

——アフリカにしても日本にしても、それぞれ歴史や文化の違いがありますから、それを考慮した政策でないと、無理が出てくるのではないのでしょうか。日本における男女平等や女性のエンパワーメントのやり方もあると思うのですが。

鈴木 日本の女性には、完璧な母親でありたいという気持ちですごく強いと思われれます。お客様にはご馳走を出そうとします。北欧の友人の家に泊めてもらっ

慮しながらお願いします(笑)。お互い仕事を持っているのだから、妻が子育てと仕事を両立させることに積極的に協力するという価値観に夫はまだなっていない。でも、これだけやらせてもらっているのだからと、どうしても控えめに考えてしまいます。

鈴木 私も、翌日海外に出張する場合でも夜中に夫の靴を磨いたり、夫の朝食をつくったりします。「しなくていい」と、夫は言うのですが、やつぱり内緒でしてしまふ。夫には、少しでもリラクセスしてほしいと思うものですから。

若者がアフリカ体験で成長して親は喜ぶ

細川 女性的な優しさですね。自分が大変でも誰かのためにやっつけてあげたいと思うのは一番女性らしい気持ちでしょう。他者への優しさや女性の視点は援助をする上でも大事なことです。

鈴木 それから、日本人の援助の仕方は地元の人と一緒になっ

ても、夕飯は買ってきたハムとパンを並べるだけでした。それなら男性にもできますよね。

子育てと仕事の両立 男性の価値観崩壊

細川 食事というのはとても大きな「作業」で、子供にきちんと食事をつくってあげようと思っても、仕事を持っているとなかなかできません。私の場合はフリーのジャーナリストですが、まだまだいいのですが、お勤めを



シンボジウムで来日したサックス教授と共に

て、彼らの目線で行なうようです。一方、欧米の人たちは、どちらかというと上から目線で支援します。植民地時代には教育をほとんど与えなかったことも問題です。

また、日本人は他人からどうみられるか、あるいは人の役に立っているかどうかで、自分の価値を判断するところがありまが、他の国の人は自分のやりたいことをやって満足する傾向が強いですね。

細川 周りの人を幸せにできる人間として成長し、人生を送ることができるとか、大切にすることを大切にしたいというの日本人らしい感性ですね。

鈴木 それは素晴らしいですが、日本はあまり国益と絡めないで支援する傾向があります。他の国は、自分の国にも利益になるという視点ですが、日本は頼まれたらそのまま支援する。それでは感謝はされますが、無駄も出てきます。個人的には、日本のODAは相手国のみならず、

して、夕方5時や6時まで仕事をしていたら、とてもきちんとした食事はつくれない。

最近さらには「食育もしつかりやいなさい」とプレッシャーをかけられる。確かに大事だと思いますが、子供が産まれても働き続ける選択をするのであれば、多少お給料が減っても時短やワーク・シェアリングで、子育てのための時間を確保するということではないと、日本のお母さん像にはたどり着けない。

鈴木 日本人の勤務時間が長く、残業手当を給料の一部に組み込んでいることも問題です。働き方も効率よくすべきですし、保育園をもっと充実して「育メン」も奨励したほうが良いと思います。

細川 日本の社会全体が当たり前としてやってきた文化を変えないと、(子育てと仕事の両立は)難しいと思っています。男性の価値観をなかなか崩せなくて、私も主人に早く帰ってきてもらわないといけない時は、遠

日本の国益にもなり、イメージも良くするような使い方をしてほしいと思います。

細川 学生さんをアフリカに連れて行かれているということですが、どんな反応ですか。

鈴木 アフリカに行くこと、若い人は遅くなりますね。私はこのプロジェクトで、ドナーである米国の富豪と一緒にアフリカに行くことができました。彼らは「(自分の)子供たちが何もうる気がなくて困る」と言っていたのですが、その子供たちをサハラ砂漠以南の1日1ドル程度で暮らすミレニアム・ビレッジに連れて行って一年過ごさせると「息子たちの人生が変わった。本当に良かった!」と喜んでいました。

細川 日本人の場合も視野が広がるように、若いうちに海外体験の機会を与える必要がありますね。積極的に異文化や苦勞を経験しながら、国際社会で存在感のある日本人が一人でも多く育ってほしいと思います。